



自分がガンになったら…、
家族がガンになったとき…。

そんな時のための

“ガン”誌上ワンポイント講座

3人に1人がガンでなくなる時代

死亡者数は交通事故の30倍

罹患者の22%が55才~64歳

(年間30万人以上の方がガンで亡くなる時代)

このような現実をきちんと把握されていますか。ガンはとっても身近な存在なのです。しかし、「自分だけは大丈夫」と多くの方が思っています。「まさか」の時にきちんとした対応ができるように、ラ・ポルテではガンの誌上講座をシリーズでお届けすることにいたしました。講師をしていただくのは、米国国立がん研究所(NCI)にて3年間最先端の研究に従事され、現在佐田病院にてガン医療の専任チームを率いる外科医師中村光成氏です。新講座のスタートです。

ガンは恐ろしい？

みなさんはガンという病気についてどのように理解されているでしょうか？多くの方は「死に至る恐ろしい病」といったイメージを持たれているのではないのでしょうか。しかし、それはみなさんがガンについて正確な知識や情報を十分に持っていない、という理由による部分が大きいのではないのでしょうか。例えば、誰でも交通事故で死ぬ可能性はありますが、交通事故を「死に至る恐ろしいもの」と考える人はほとんどいないでしょう。それは、みなさんが交通事故の原因や仕組みを理解し、対処する方法を理解しているからです。同じように、ガンのことについてよく理解し対処方法を持っていれば、無闇に恐れたり狼狽することはなくなるでしょう。

ガンという病気は驚くほど身近な存在

ただし、ガンは交通事故以上に、みなさんが想像している以上に身近に存在しています。現在、日本では年間30万人以上の方がガンで亡

くなっています。交通事故で亡くなる方がせいぜい1万人ですから、30倍以上ということになります。ガンが死亡原因のトップになっていることをご存知の方は多いと思いますが、これは日本人の3人に1人がガンで死ぬということであり、4人家族であれば誰か1人がガンで亡くなるということなのです。ですから、常日頃からガンに対して正確な情報を持ち正しく理解し、対処する方法を考えておくことは、みなさん自身だけでなく、ご家族にとっても重要だといえるでしょう。

早すぎることはない、準備と対処方法

25歳以上ではガンが第一の死亡原因となっていることを考えれば、社会人になった時点でガンに対する対策を始めても早過ぎるということはないでしょう。また、55~64歳でガンの死亡数はピークに達していますから、親がガンになるということも十分ありえることです。

診療をしていて感じるのですが、ガンと診断された患者さんの多くは、「すべておまかせします」と言われます。それは医者としてありが

たいことですが、基本的には、患者さんの意志と考えをもとに治療方針を検討してゆく、患者さんといっしょになってベストな方法を模索することが理想だと思えます。

今回は「身近なガン」についてお話ししました。どのように準備し、対処していけばいいのかを、これからみなさんと一緒に考えてゆきたいと思っています。

「まさかの時」、最善の対処を行うためにも、日本最大の課題とも言えるガンに関する勉強を始めませんか。



profile ■■■■■

中村 光成

(なかむら みつなり)

外科医師・医学博士
奈良市出身
佐賀医科大学卒、九州大学
腫瘍制御講座に所属
米国国立がん研究所(NCI)
でガンの研究を行う
現在「緩和外科」医療を実
践する臨床医として活躍
*掲載のデータは厚生労働
省資料/2005年